

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の1年目)

1. 研究課題

芸術と社会

Art and Society: The Various Aspects of Creative Activities in the Modern Age

2. 研究代表者氏名

高階 絵里加

Takashina Erika

3. 研究期間

2020年4月-2023年3月(1年目)

4. 研究目的

芸術を歴史・文化・社会との関連から多角的に考察し、広い意味での近代における芸術と社会の多様な結びつきの一端を明らかにすることをめざす。諸分野の研究者の交流を通じて、社会の中での芸術の諸相を考える。

In recent years, there has been a growing amount of research to examine art from a more multifaceted perspective by looking into its connection with history, culture, and the society. For example, while conducting research on artists and artworks is fundamental to the field of art, a variety of other approaches to the subject are also being examined, such as, various art movements, urban and lifestyle culture, the shifts in the art market, changing patrons, cultural support, development of journalism and critiques, advertisement and art, diversification of exhibition spaces, widening activities at museums and art galleries, as well as research on recipients of art. This joint research project will contribute towards this effort by inviting researchers from other fields catering to art, such as that of history, literature, film, and design to participate in workshops which attempt to clarify, in a broad sense, the various segments of connections that artworks and artists have with our society in the modern age. Essentially, we would like to explore the various aspects of art in the society by examining specific works and materials, or perhaps the artists and events. Depending on the situation, these meetings will be conducted at an art gallery or museum and make the area where displays and exhibits are held as the place of study.

5. 本年度の研究実施状況

三年計画の第一年目である本年は、当初 4 月の開始を予定していたがコロナ禍のため開始が延期され、9 月よりオンラインによる開催を実施することとなった。今年度はすべての研究会をオンラインによる開催した。第一回研究会は 9 月 26 日（土）に開催、岡田暁生氏「パウル・ベッカーと音楽社会学のはじまり」および藤井俊之氏「芸術と社会、自律と媒介——アドルノの音楽論に注目して」の 2 名の発表者による音楽と社会に関連する発表が行われた。第二回研究会は 10 月 17 日（土）に開催、近代日本における絵葉書をテーマとして、大原由佳子氏「絵葉書アルバム」から見る第 1 回渡欧時の黒田重太郎」および小嶋ひろみ氏「竹久夢二とエハガキ—月刊夢二カードと月刊夢二エハガキ—」の 2 名による発表が行われた。第三回研究会は 11 月 21 日（土）に開催、京都文化博物館で開催中の「舞妓モダン展」に関連し、植田彩芳子氏による発表「日本近代における描かれた舞妓について」が行われた。第四回研究会は宮下規久朗氏により、ヨーロッパと日本の歴史的疫病流行と美術の関連についての発表「疫病と美術」が行われた。第五回研究会は 2021 年 3 月 6 日（土）に、三宅拓也氏による発表「芸術と社会の接点としての商品陳列所」が行われた。いずれの研究会においても、発表後に芸術と社会に関わる活発な議論が交わされた。

6. 本年度の研究実施内容

2020-09-26 第 1 回 パウル・ベッカーと音楽社会学の始まり 発表者 岡田暁生 人文科学研究所 芸術と社会、自律と媒介——アドルノの音楽論に注目して 発表者 藤井俊之 人文科学研究所

2020-10-17 第 2 回 「絵葉書アルバム」から見る第 1 回目渡欧時の黒田重太郎 発表者 大原由佳子 滋賀県立近代美術館 竹久夢二とエハガキ—月刊夢二カードと月刊夢二エハガキ— 発表者 小嶋ひろみ （公益財団法人）両備文化振興財団 夢二郷土美術館

2020-11-21 第 3 回 日本近代における描かれた舞妓について 発表者 植田彩芳子 京都文化博物館

2020-12-05 第 4 回 疫病と美術 発表者 宮下規久朗 神戸大学

2020-03-06 第 5 回 芸術と社会の接点としての商品陳列所 発表者 三宅拓也 京都工芸繊維大学

7. 共同研究会に関連した公表実績

なし

8. 研究班員

所内

高階絵里加、池田さなえ、岡田暁生、小関隆、高木博志、立木康介、福家崇洋、藤原辰史、森本淳生、藤井俊之

学内

花田史彦(教育学研究科)

学外

有賀茜(京都府京都文化博物館)、植田憲司(京都府京都文化博物館)、植田彩芳子(京都府京都文化博物館)、大久保恭子(京都橘大学 発達教育学部)、大原由佳子(滋賀県立近代美術館)、小川佐和子(北海道大学大学院文学研究院)、國賀由美子(大谷大学文学部)、久保豊(富山大学)、郷司泰仁(香雪美術館)、小嶋ひろみ(公益財団法人 両備文化振興財団 夢二郷土美術館)、実方葉子(泉屋博古館)、柴田就平(笠岡市竹喬美術館)、清水智世(京都府京都文化博物館)、鈴木千栄子(毎日放送)、孝岡睦子(大原美術館)、高階秀爾(大原美術館)、竹内幸絵(同志社大学)、竹嶋康平(泉屋博古館)、多田羅多起子(広島大学 大学院人間社会科学研究科/教育学部 造形芸術系コース)、永井隆則(京都工芸繊維大学 デザイン・建築学系)、中野慎之(文化庁文化財第一課 文部科学)、林洋子(文化庁)、藤本真名美(和歌山県立近代美術館)、古田理子(①景聴園(現代作家グループ) ②株式会社高島屋 京都店 販売第1部 化粧品売場)、イリナ・ホルカ(東京大学大学院総合文化研究科国際日本教育研究機構)、松原史(北野天満宮北野文化研究所)、三宅拓也(京都工芸繊維大学デザイン・建築学系)、宮下規久朗(神戸大学大学院人文学研究科)、森光彦(京都市学校歴史博物館)、山口真有香(滋賀県立近代美術館)、山田真規子(目黒区美術館)、VOLK, Alicia (アリサ・ヴォルク)(University of Maryland (メリーランド大学))、河本真理(日本女子大学)、久保昭博(関西学院大学)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
学内(法人内)		11	0	2	2	1	26	0	10	10	5
		(2)	(0)	(1)	(1)	(0)	(10)	(0)	(5)	(5)	(0)
国立大学		7	1	2	2	0	23	3	6	6	0
		(3)	(1)	(1)	(1)	(0)	(8)	(3)	(4)	(4)	(0)
公立大学		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
私立大学		5	0	0	0	0	15	0	0	0	0
		(4)	(0)	(0)	(0)	(0)	(12)	(0)	(0)	(0)	(0)
大学共同利用機関法人		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
独立行政法人等公的研究機関		11	0	5	4	0	19	0	7	7	0
		(8)	(0)	(4)	(3)	(0)	(17)	(0)	(7)	(6)	(0)
民間機関		11	0	5	2	0	30	0	11	8	0
		(7)	(0)	(3)	(2)	(0)	(23)	(0)	(9)	(8)	(0)
外国機関		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
その他		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
計	0	45	1	14	10	1	113	3	34	31	5
		(24)	(1)	(9)	(7)	(0)	(70)	(3)	(25)	(23)	(0)

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	2		0	
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)	0		0	
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	52		3	
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	0		0	
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0		0	

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

雑誌名	掲載論文数	掲載年月日	論文名	発表者名
『史林』	1	R3. 1	史料紹介 川島織物セルコン・川島織物文化館所蔵「二代・川島甚兵衛関係文書」品川弥二郎書翰	池田さなえ
大高保二郎、永井隆則（編）『ピカソと人類の美術』三元社	1	R2. 4	ピカソ／剽窃／コラージュー〈造形的インターテクスチュアリティ〉の論理	河本真理
『西洋美術研究』	1	R2. 9	美術史学／フェミニズム／ポストコロニアリズムのインターフェース	河本真理
石田勇治ほか（編）『ドイツ文化事典』丸善出版	1	R2. 11	闘争の芸術——第一次大戦に参加した美術家たち	河本真理

木俣元一・松井裕美（編）『古典主義再考 II 前衛美術と「古典」』中央公論美術出版	1	R2. 12	前衛／古典主義／プリミティヴィスム——両大戦間期の美術の問題系をめぐって	河本真理
『須田記念 視覚の現場』	1	R3. 2	スペインインフルエンザ／大戦(グレート・ウォー)／美術——〈忘れられた〉パンデミック再考	河本真理
『近代』（神戸大学近代発行会）	1	R3. 2	ハンナ・ヘーヒ——美術史の〈語り〉とコラージュ／モンタージュをめぐって	河本真理
岩城卓二、石井美保、田中祐理子、藤原辰史編著『環世界の人文文学』人文書院	1	R3. 3	震災後文学の動物と書き直し—中森明夫、川上弘美、古川日出男のテキストを中心に—	ホルカ イリナ
Irina Holca, Carmen Sapunaru Tamas, <i>Forms of the Body in Contemporary Japanese Society, Literature, and Culture</i>	1	R2. 5	Home Is Where Mother Is, and the Way to a Man's Heart Goes through His Stomach: Bodies in the Kitchen (Yoshimoto Banana)	ホルカ イリナ
『美術フォーラム 21』	1	R2. 12	セザンヌ・コレクションの社会学	永井隆則
『鹿島美術研究年報』	1	R2. 11	セザンヌ芸術の展開にジャズ・ド・ブッフアン、セザンヌ家旧邸を中心とするエクス・アン・プロヴァンスの環境がもたらした創造的作用に関する研究	永井隆則

Les actes du colloque international :Peut-on parler d'une amitié créative entre Cezanne et Zola ? (https://www.societe-cezanne.fr/2020/05/06/zola-accuse-par-sa-plume-cezanne-par-son-pinceau/)	1	R2. 5	Zola accuse par sa plume, Cezanne par son pinceau	Takanori NAGAI
『國華』	1	R2. 9	岡本神草筆 口紅	植田彩芳子
『鹿島美術研究年報（別冊）』	1	R2. 11	太田喜二郎の研究—雑誌『徳雲』をめぐる京阪神文化人ネットワーク—	植田彩芳子
『日本美術のつくり方 佐藤康宏先生の退職によせて』羽鳥書店	1	R2. 11	描かれた舞妓—竹内栖鳳筆《アレタ立に》の史的位置	植田彩芳子
『京都メディア史研究年報』	1	R2. 4	稗史を構想する—原武史『「松本清張」で読む昭和史』	花田史彦
『社会教育学研究』	1	R2. 5	勤労者を対象としたメディア社会教育の「受け手」研究	花田史彦
駒込武（編）『生活綴方で編む「戦後史」—〈冷戦〉と〈越境〉の1950年代』岩波書店	1	R2. 8	「大衆」と「民族」のあいだ—映画《山びこ学校》をめぐる市場	花田史彦
谷川建司（編）『映画産業史の転換点—経営・継承・メディア戦略』森話社	1	R2. 7	グラビアと啓蒙—戦後初期の『近代映画』が伝えたもの	花田史彦

『民衆史研究』	1	R3. 2	映画史と民衆史のあいだー藤木秀朗著『映画観客とは何かーメディアと社会主体の近現代史』	花田史彦
近藤和都・森田のり子・大塚英志 (編)『牧野守 在野の映画学ー戦時下・戦後映画人との対話』太田出版	1	R3. 1	映像論から戦後知へー江藤文夫の 1980 年代	花田史彦
木島俊介編『モネとマティスーもうひとつの楽園』求龍堂	1	R2. 5	マティスの楽園表象と切り紙絵	大久保恭子
『日仏美術学会会報』	1	R2. 9	第二次世界大戦期の『フランス性』をめぐる芸術的地政学	大久保恭子
『京都市京セラ美術館開館記念展 京都の美術 250 年の夢』京都市京セラ美術館	1	R2. 4	近代京都日本画を育んだ場所ー明治前中期における画家組織ー	森光彦
『幸野楳嶺展図録』海の見える杜美術館	1	R2. 10	幸野楳嶺の人物表現について	森光彦
川口幸也編『ミュージアムの湯鬱ー揺れる展示とコレクション』水声社	1	R2. 6	追悼絵馬とその展示	宮下 規久朗
東京造形大学ダ・ヴィンチ・プロジェクト編『よみがえるレオナルド・ダ・ヴィンチ 作品復元プロジェクト』東京美術	1	R2. 9	レオナルドとカラヴァッジョ	宮下 規久朗

久保豊・『渋谷実 巨匠にして異端』・ 水声社	1	R2. 10	「渋谷ジイ」が描く女性の老い ——『もず』の淡島千景を代 表例に	久保豊
『キネマ旬報』	1	R2. 10	渡哲也と石原裕次郎 秘められ た優しさ、憂愁	久保豊
『キネマ旬報』	1	R2. 8	日本映画における男性同性愛 表象の過去・現在・未来	久保豊
久保豊・『映画産業 史の転換点——経 営・継承・メディ ア戦略』・森話社	1	R2. 7	興行戦略としての「青春余命 映画」:『愛と死をみつめて』 と吉永小百合	久保豊
『ユリイカ』	1	R2. 4	ドロシーの友だち同士の往復 書簡	久保豊
谷川建司編『映画 産業史の転換点— 経営・継承・メデ ィア戦略』森話社	1	R2. 7	映画『地獄門』と和田三造	高階絵里加
『京都市京セラ美 術館開館記念展京 都の美術 250 年の 夢 第1部 江戸か ら明治へ:近代への 飛躍』	1	R2. 5	作品解説 (分担執筆)	中野慎之
『京都市京セラ美 術館開館記念展京 都の美術 250 年の 夢 2部 明治から 昭和へ:京都画壇の 隆盛』	1	R2. 10	作品解説 (分担執筆)	中野慎之
『京都の美術 250 年の夢 第1部 江戸から明治へ: 近代への飛躍』	6	R2. 4	塩川文麟 作家解説、作品解説 森寛斎 作家解説、作品解説 山元春挙 作家解説、作品解説 伊藤小坡 作家解説、作品解説 山元春挙「ロッキーの雪」 竹内栖鳳「ベニスの方」 都路華香「吉野の桜」作品解説	大原由佳子

『近江の画人 海 北友松から小倉遊 亀まで』	3	R2. 6	横井金谷」「張 月樵」「玉 湍」	大原由佳子
『京都の美術 250 年の夢 第2部 明治から昭和へ： 京都画壇の隆盛』	1	R2. 10	川村曼舟 作家解説、作品解 説	大原由佳子
『滋賀県立近代美 術館研究紀要』	1	R3. 3	黒田重太郎 絵葉書アルバム 翻刻（2）	大原由佳子
『鹿島美術研究』	1	R2. 11	京都画壇の19世紀一幸野楳嶺 私塾資料を中心に一	多田羅多起 子
『近代京都画壇の 開拓者 幸野楳 嶺』展図録（海の 見える杜美術館）	1	R2. 10	受け継がれた私塾資料 楳嶺 から栖鳳へ	多田羅多起 子
<i>Slavic and East European Journal</i>	1	R2 spring	Recent Trends and Advancements in Slavic Studies in Japan: Film Studies,	Sawako Ogawa
谷川建司（編）『映 画産業史の転換点 ー一経営・継承・ メディア戦略』森 話社	1	R2. 7	絵師と映画監督：時代考証に みる甲斐庄楠音と溝口健二の 通底性	小川佐和子
『北海道大学文学 研究院紀要』	1	R2. 12	戦間期ベルリン・オペレッタ の重層性：メロドラマ化と自 己パロディ	小川佐和子
『蘇った世界の映 画』	1	R2. 12	ロシア	小川佐和子
『演劇研究』	1	R3. 3	ハプスブルク帝国末期のユー トピア：ウィーン・オペレッ タにおける多民族・多文化表 象	小川佐和子
『人文学報』	1	R3. 3	二重の神話化：日本における 『戦艦ポチョムキン』上映史	小川佐和子

『映画学』	1	R3.3	義理の葛藤：翻案における新派映画の「メロドラマ的想像力」	小川佐和子
Revue A	1	R2. octobre- décembre	Le «style de tableau bouddhiste» chez Gentaro Komaki	Shimizu Tomoyo
弘中智子・清水智世編『さまよえる絵筆―東京・京都戦時下の前衛画家たち』みすず書房	1	R3.2	塗られない画布―転換期・京都の再断面	清水智世
伏見稲荷大社『朱』	1	R3.3	小牧源太郎と稲荷と狐―前衛画家の描く稲荷信仰	清水智世
『刺繍の近代―輸出刺繍の日欧交流史―』思文閣出版	1	R3.3		松原史
『香雪美術館 研究紀要』	1	R3.3	二つの聖徳太子像 ―香雪本と弘川寺本―	郷司泰仁
Breen, Maruyama, Takagi, eds., <i>Kyoto's Renaissance Ancient Capital for Modern Japan</i> , Renaissance books, London	1	R2	Nihonga in Kyoto at the dawn of the modern era	Kuniga Yumiko
石丸正運編『近江の画人』サンライズ出版	1	R2.5	「商いと文化の伝播」「円山四条派と岸派の隆盛」ほか	國賀由美子
『史学雑誌』129 編 5 号	1	R2.7	2019 年の歴史学界―回顧と展望― 日本・中世・美術	國賀由美子
大谷大学日本史の会『歴史の広場』23 号	1	R2.12	研究の原点―コロナ災禍に思う―	國賀由美子
『湖国と文化』174	1	R3.1	問われる県の知性	國賀由美子

号				
『大谷大学図書館・博物館報 書香』38号	1	R3.3	《破来頓等絵巻》のこと	國賀由美子
『大谷学報』第100巻第2号	1	R3.3	破来頓等絵巻考—大谷大学博物館本の紹介をかねて—	國賀由美子
『近江八幡の歴史』第9巻 地域文化財・年表・便覧	1	R3.3	「『桑実寺縁起絵巻』の成立」「『長命寺参詣曼荼羅』と『熊野観心十界図]」「塩川文麟の来幡」「近世の画人たちと近江八幡」	國賀由美子
三木順子、平芳幸浩、井戸美里編 『芸術の価値創造 京都の近代からひらける世界』昭和堂	1	R3.3	京狩野研究と土居次義の眼	多田羅多起子
『人文学報』	1	R3.3	青年の理想主義について—映画『若者たち』とポスト高度成長期のサークル文化運動	花田史彦
『美学の事典』	1	R2.12	フランス近代美術を中心とする、西洋近代美術の日本での受容	永井隆則他 (共著)
『近代京都日本画史』	1	R2.8	近代京都日本画略史・各論・作品解説	植田彩芳子・中野慎之・藤本真名美・森光彦
『舞妓モダン』	1	R2.10	日本近代における描かれた舞妓・作品解説	植田彩芳子 (編著)
『開校140周年 京都府画学校への道』	1	R2.4	概論及び作品解説	森光彦(編著)
『Inside/Out——映像文化とLGBTQ+』	1	R2.9	あの虹に届くまで、リンゴの木を植えつつける	久保豊(編著)

11. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

なし

12. 次年度の研究実施計画

本年度はコロナ禍のため実質秋からの始動となり研究会開催回数が少なくなりましたが、次年度は引き続きオンラインシステムも活用しつつ年間 10 回程度の開催を予定している。内容としては、複製芸術と社会に関する発表、芸術と第一次産業に関する発表、京都の歴史画に関する発表、戦争と前衛芸術に関する発表、広告・デザインと社会に関する発表、明治の刺繍芸術に関する発表、オペレッタと近代社会に関する発表その他を行う予定である。

13. 次年度の経費

なし

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

コロナ禍により研究会の開始が遅れたこともあり、次年度はいまのところ研究成果公表の予定はない。今後の展望としては、次年度も引き続き、歴史、思想、建築、文学、音楽、美術と多岐にわたる研究領域を専門とする班員が「芸術と社会」という共通テーマにもとづく発表と活発な議論により視野を広げ、それぞれの研究テーマに本質的な変革をもたらす場となる研究会の開催をめざす。次年度にかけては、いかに新たな問題意識を多彩に広げ得るかという点に研究会の主眼を置き、それをどのようにまとめて成果としてゆくかについては三年目に入ってから具体的に案を練ってゆく予定である。